

## 座談会

## 建学精神と私学教育

司会

深田 尚彦  
(大阪芸術大学学長)伊藤 唯真  
(佛教大学元学長)笠原 芳光  
(京都精華大学理事長・元学長)北崎 豊二  
(大阪経済大学学長)

(ABC順・敬称略)

笠原 本日は「建学精神と私学教育」と

いう題で、特に同志社のご出身で京都に近い大学の現在学長をしておられる先生、あるいはかつて学長をしておられた先生にお話を伺いたいということです。

そしてなぜか私に司会をやれということ依頼がありましたので、たいへん僭越ではございますけれども、司会をさせていただくことにいたします。

最初に四つほどポイントを申し上げますと、初めに自己紹介をしていただきます。ご専門の学問及び学長を現在あるいは過去にどれぐらいなさったか、あるいはそれにまつわる苦心談というようなものである限り、どの大学もお持ちになって

いるはずですからそれについて、現在どのような生かしておられる、生かそうとしておられるかということについてお話を伺いたい。それから、今大学はとくに青年人口の減少から大変難しい時代になってまいりました。これからの大学における私学教育はいかにあるべきかということについて先生方のご意見をそれぞれお伺いしたい。

最後に同志社に対する提言、われわれ卒業生として、校友として、いまの同志社に対する考えを、率直に自由にお話しいただいて、同志社のためになればと考えています。

最初に現在、大阪経済大学の学長でいらっしゃいます北崎豊二先生にお話を伺

わせていただきます。

## 私と同志社

北崎 私は大学は昭和二十八年に卒業いたしました。学部は経済学部で、大学では住谷悦治先生及び小松幸雄先生にたいへんお世話になりました。

大学院はそのまま経済学研究科に進んだんですが、体を壊しまして修士課程を終えたのが三十一年で、いまの大学に勤めたのは昭和四十四年ですから二十数年たちます。その前に中学で六年、高校で四年、短大で二年教えました。

専門は日本社会史です。学長になったのは昨年の一一月一日です。私の大学は

選挙でして、第一次は教職員で、第二次は教員だけで選びます。たまたま選ばれて一年間学長を務めさせてもらっております。

笠原 ありがとうございます。

それでは続いて何かお年のお若い順のような感じがいたしますけれども、伊藤唯真先生。伊藤先生は佛教大学の元学長をしていらつしやいました。

伊藤 私は佛教大学を卒業したんですが、大学院で勉強したいというときに、一つの機縁がありましたのは、石田一良という、同志社で文化史学専攻をおつくりになった先生がいらつしやったことです。その先生がちょうど法然のこと、特に浄土教美術をやっておられました。同志社の先生で仏教のことをやっていらつしやる先生がおられるのならそこへ行つて、もっと視野を広めたほうがよからうということ、幸い大学院へ入れていただきました。それが昭和二十八年の四月です。修士課程を終えたのが昭和三十年でございます。そのあとドクターコースへ進みました。ドクターを終わつたのが昭和三十三年でございます。それか

ら高校の教師を十年いたしまして、それから佛教大学へ戻りました。いつも冗談のように言うのですが、初め佛教大学で学んでから同志社へ来て、また佛教大学へ戻りましたので、それを表現すると、ナムアーメンダブツだなあと（笑）。

佛教大学もそのころはまだ僧侶養成機関としての使命を主とした大学でございましたが、昭和四十年代からいろいろな学部ができて、僧侶以外の、まあ「一般子弟」と呼んでおりますが、その方々も多く入ってくるというような、ちょうど佛教大学の発展期に、学生募集なども手伝いました。私が学長になりましたのは平成元年でございます。それまでは僧侶養成が主でございますから、学長はずつと仏教学の出身者ばかりでした。初めて歴史をやった者がなつたものですが、いろいろな苦労もございましたけれども、平成元年から一期四年を務めました。ちょうど私の前任者のとき、いろんな拡大膨張が進められておつたのですから、大学に金属疲労が出ていないか検証をしなきゃならないし、佛教大学のアカデミズムの高揚がいちばん大事なときだ

からと、そのようなことに力を注いで、平成五年の三月まで学長を務めたと、こういう経歴でございます。

笠原 それでは最長老の大阪芸術大学並びに浪速短期大学の学長を現在していらつしやいます深田尚彦先生にお願いします。

深田 私は戦中に大阪の天王寺師範を卒業しました。軍隊に行つたときは教員の身分で行きました。帰つてきたら、食べ物がないときで、先生方、男はみないないので、おばさんやおばあちゃんも一回職場に帰ってきて、食べ物はどうしてふやすかというような。食物の話ばかりでね、これはおるところじゃないと思つて、私はやめました。

それで、弟たち二人が同志社を出ておりました。「兄貴、家でぶらぶらしておつても、実力なんていうてもどうにもならんぞ。学歴が大事や」と言うのですね。私もそうかなと思つて、二人の弟のあとから編入で同志社に入りました。

入ったとき、ぼくは哲学と数学が好きで、だけどどちらもするだけの才能はないので、たぶん心理学が両者の中間かな

と思つて心理学に入つたのです。大学を出たときは大学院はなかった。

卒業後伏見にあつた京都府の児童相談所に十一年勤めました、児童相談所の技師をして。京都府に一人ですから、いい身分でしてね。それは研究職みたいなものでした。昭和三十六年になつて同志社女子大学に呼んでもらつて講師になりました。同志社には二十八年勤めさせてもらいましたが、最後の五年は家政学に移りました。けれども、その前の二十三年は一般教育所属でしたから、ぼくは心理学だけなんです、やる講義は。

とにかく教えるのが楽しかった。ぼくが行つたときは女子大の学生は全学で千六百人ぐらいでした。そのうちのかなりの人が心理学をとるんですよ。ああ、おれの講義はうまいんだなとうぬぼれてました(笑)。点つけは苦痛でしたけど、自信がありました。いや、勝手に持つてゐるんですからうぬぼれてですけど、とても幸せに過ごせました。

最後の五年は家政学に移りましたからゼミというのを持ちました。六十五歳でやめた時にちょうど良く、話があつて、

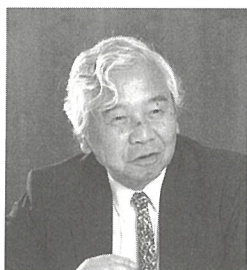
いまの大阪芸大に就任したんです。六十から七十まで大阪芸大の教授をしました。そこでは芸術心理学の講義をし、造形心理学と言いましたけど、子供の描く絵の心理学的実験的研究をしました。

大阪芸大でまた定年が来たんですけど、定年の前の年ぐらいに大学院ができました。私は都合よく大学院の教員として入れたんです。やめる前の年に大学院ができる、修士課程の完成年度まで二年要りますから、定年のあと一年嘱託教授を務めました。いよいよ七十一でやめるときが来ましたから、まあいろいろな計画を立てました、やめてからのね。そしてそれからその年に前学長が病氣になられました。そのときにぼくとは選挙じゃなく理事会任命なんです、学長をやつてくれということでした。私は社会性がなし、人と一緒に過ごすなんて全くしたことのない人間なんでね。本を読んで外国に手紙を書くだけ、あとはコンピュータで計算するだけの教員生活でしたから、ずいぶん考えたんですが、結果として引き受けました。それが去年の三月だったんです。四月からという話でしたけ

ど、急に学長が亡くなられたので、三月に辞令をもらつて二十分後に卒業式の式場の壇上で証書渡しをしました(笑)。

笠原 それでは私ですが、私は戦後すぐ、当時ちょうどマルクス主義と実存主義とキリスト教という、三大思想が渦巻いてゐるような時代でございまして、そのころにキリスト教にたいへん関心をもつようになりました。旧制高校のころにプロテスタントの教会で洗礼を受け、同志社の神学部三年編入で入つたんですけれども、それ以後、大学院神学研究科を修了いたしました。これが昭和二十九年です。

最初三年間は教会に勤めまして、次第にキリスト教に対する疑問が出てまいりました。同志社のキリスト教というのは正統主義のキリスト教よりも、自由主義的なキリスト教が特色であるところですから、私もやはり教義的な正統主義の、あるいは制度を非常に重んずるようなキリスト教よりも、やはりイエスの生きかたというか、イエスの精神や思想、それがいちばんもとだという考えになつてまいりました。そのときに、同志社大学で



笠原 芳光氏

からはら よしみつ／1927年大阪  
市生まれ。同志社大学大学院神学  
研究科修士課程修了。日本基督教  
団神戸教会伝道師をへて'57年よ  
り12年間、同志社大学宗教主事。

現在、京都精華大学文学部教授。  
'83年より9年間、学長。'94年より  
現職。専攻は宗教思想史。かたわ  
ら聖書を古典として現代的に解説  
する森集会を主宰。近著に『宗教  
の森』（春秋社）、『はじめに言葉あ  
り』（春秋社）、『言葉と出会う本』  
（法蔵館）などがある。

宗教主事という学生の課外教育を担当するようになって、お話がございました。十二年間勤めたのですが、その当時、法学部長や学生部長などをしてもらった岡本清一先生が新しくつくられた短期大学の学長になられるということで、岡本先生から誘われまして、現在の京都精華大学に勤めるようになりました。それでいまは宗教思想史、狭い意味でのキリスト教を越えて広いいろんな宗教、特に形態としての宗教よりも内容といえますか、宗教性というものを重ねる立場で、思想とか文化とかの関連における宗教の問題を歴史的に勉強しております。

京都精華大学は「自由自治」を理念にしている大学でして、特に民主主義というか、むしろ直接民主主義的な学校です。

学長はもちろん選挙です。学長の選挙権だけでなく被選挙権も教員と職員全員にあります。いまから五年ほど前まで三期九年間学長をやられまして、現在は理事長をしております。学長というのは二つのタイプがあると思うんです。非常にすぐれた方でリーダーシップを発揮されるという、悪い意味ではワンマン的なタイプの方と、みんなの意見をできるだけ尊重してまとめ役になるというタイプの方とがあらわれると思うのですが、私は、後者のタイプだったと思います。何とか教員、職員のおかげでやってこれました。そして現在、理事長という職は不得手なんですけれども、これもまた人がなくなっております。私どもの大学は学長や理事長になりたい人はだれもいないと

いうようなところです。というのは、たとえば手当がほかの大学に比べますと格段に低いということがございます。しかし学部長や教務部長、学生部長などは手当がまったく違います。そのためによく言えば権威主義的な考えを抑えるというようなことがあります。そういうところで、ある意味では自由にやっております。

### ■ 建学精神の喪失は 私学の崩壊

笠原 それでは本題に入らせていただきます。「建学精神と私学教育」とというのが今日の題でございます。国公立大学と私学との違いというのは、端的には私学には創立者がいる。そして主として創立者



北崎 豊二氏

きたざき とよじ／1929年大阪市生まれ。'53年同志社大学経済学部卒業。'56年同志社大学大学院経済学研究科修士課程修了後、公立中学校・高校および私立短大の教員を経て、'69年大阪経済大学に助教授として就任、'75年教授。'95年11月より大阪経済大学学長。専門は日本近代社会史で、著書に『明治労働運動史研究』（雄山閣）、『幕末維新の大阪』（松籟社）、『近代地方民衆史研究』（法律文化社）、『近代大阪の社会史的研究』（法律文化社）などがある。

に基づくところの建学の理念というのが非常につきりしております。もちろん国公立大学にも建学の理念、精神はあると思いますけれども、私学はそれが非常に大きな特徴だと思います。

ただ、同志社でもそうなんですけれども、歴史の長い大学であれば、それが過去のものになってしまつて形骸化してしまふという傾向がどこにもあるかと思ひます。先生方の大学では、それぞれの建学の精神を現在どのように生かさうとしておられるか、そのあたりをめぐつて広い意味で建学の精神についてお話ししていただきたい。

北崎 私大学では、ややこしいんですが、一応、黒正巖先生という京大の農学部教授であり、後に第六高等学校の校

長もなさつた方ですが、その方が創立者ということになっております。この方は京大の教授でありましたけれども、非常に金持ちで、昭和十年に私財を投げうつて潰れかかつていた浪華高商（昭和七年創立）を引き継ぎ、昭和 high とし、今日の大阪経大の基礎を築きました。その方を創立者とし、その方の精神、つまり黒正イズム、あるいは黒正精神、それを高商から大学の草創期にはやかましく言うてきました。しかしどの大学でもそうだと思いますが、最近はそのようなものを軽視する傾向にあります。

私は同志社で学ぶ中で新島精神というものを知らず知らずのうちに身につけたように思います。そして新島精神というのはすばらしいと思います。そのような

わけで、私学においては建学の精神を柱にすえて教育する必要があると考えるようになりました。それで私は学長になってからも建学の精神をもっと重んずべきであるということを機会あるごとに申しておるわけでございます。

この間、同窓会の総会のときにもそういうことを申しますと、年配の方ほど感激されまして、「先生、きょうはいい話をしてくださつた」とおっしゃる。ところが、国公立を出た先生方は建学の精神をあまり重視されないようです。しかし、私は、私学では建学の精神、それが無いんだつたら、そんな大学はあつてもなかつても、いつ潰れてもいい大学なんだと絶えず言っているんです。うちでは、簡単に言えば「自由と融和」を建学の精神

としています。これは自由を尊重し、教職員と学生が、打ち解けて一緒に教え学ぶということです。それをいまの教職員が、また学生がどう思い実行しているのかということを決えず私は問うようにしております。建学の精神を喪失したり、軽視したりしている私学は気の抜けたビールみたいなもので、そんなものは私立大学として存在価値がないと思います。深田 建学の精神として印刷物に書いてあるものを先に申し上げておきます。それは自由の精神を最も重んじる。そして創造性を重んじる。両方とも芸術だから当然だと思います。それから総合のための分化と境界領域への探究心を怠るなど。これもいいことです。それからわれわれは日本人であるけれども、いつも世界に目を向けて、世界の資産や文化とともに評価し、世界とともに歩むような姿勢を持つ、国際的視野と言っております。それからもう一つは、学問というものはしばしば抽象的で、象牙の塔にこもりやすいが、実用的合理性を忘れてはならないということです。

この五つなんですが、どれもしくぐも

っともです。建学の精神というと、普通もっと哲学的、歴史的なものかもしれんけれども。

だけど、私は非常に大事だと思って入学の説明会なんかで申しますのは、私の大学の創始者というのは、ぼくは非常に変わっているし、すごい思っているんです。新島襄や福沢諭吉に並ぶような人だと思います。進駐軍の払い下げの自動車に保母さんたちを乗せてオルガン積んで、青い鳥幼稚園と称して、あちこちに出張保育をした、そういう人なんです。ぼくはこの生きざまというのはすごいと思います。

その人は塚本英世という人物なんです。昭和二十年に浪速英語学校をつくりました。その次には子供を育てることが大事だということで、幼稚園教員養成所をつくりました。やがて昭和二十六年には短期大学をつくり、そこに英語と保育科が設けられたんです。そのころ、人間の生活には美術が必要、と考えて、彼は大阪美術学校をつくっています。そこにデザイン美術。美術デザインとしなかったのはたぶん実用性と関係があります。そ

して広報料ができたんです。これはずいぶん古くからいいところに目をつけたと思います。その翌年、最後に商業科ができました。この浪速短期大学のデザイン美術が今の大阪芸術大学になりました。だから短大は、二十六年にスタートし、大阪芸大は三十九年にスタートしました。ですから私は建学の精神を言うよりも、こういう人によってこの学校がつけられたということを重視しています。

### 校名を変えろという 声もあるが：

伊藤 建学の精神が私学の存立を可能にしておるということは当然のことでございますが、その建学の精神がすぐわかるというのが佛教大学でございまして、佛教大学という校名それ自体ですぐわかりますように、仏教精神による人間育成を使命とした大学なのでございます。先ほどちょっと申しましたように、そもそもは僧侶の養成というところから始まりましたんですが、その教育機関は明治元年から起こっておるんです。なぜ明治元年から起こるかという、これは危機意識

からなんです。

笠原 廃仏毀釈による危機感です。

伊藤 そう、廃仏毀釈による危機感です。いろんな外圧がありました。危機状態です。しかしよく考えればそれは内から招いた危機なんです。そういう危機意識をバネにしまして、やはり学問が大事であるところから、いまの知恩院のところに勸学院というのができます。それが佛教大学のはじまりです。それからずっと僧侶の養成機関でありましたが、戦後昭和二十四年に新制大学になります。

ところが、まだ僧侶養成機関という性格がずっとございましたから、学生は少ない。先生の給与などはとても払えるところまでいかない。浄土宗が分裂をして補助金は半減するというようなこともあったり。だから大学自体が危機に瀕している。これを何とかしなきゃいかんというときに、みな一生懸命考えましたのは、仏教に学ぶということでした。もう少し詳しく申しますと、設立の母体は浄土宗でございます。浄土宗は法然によって開かれた宗派である、法然の精神をわれわれはくみ取らなければいけないというこ

とでした。法然は何を言ったかと申しますと、時代と自己をよく見つめよ。時代と自分を見つめて、それにいちばんふさわしいものを選びなさいと。決断、選択をせよということであります。先輩たちはそのときに非常にハングリーでございましたが、そのハングリーを、ひとつ法然の生きかたから教訓を得て何とかしようと考えました。その法然ですが、かれは比叡山から都へおりました、まちの中へ出ました。それから消息と申しまして手紙を送って人々にいろんな教化をしている。だからこれを現代に生かそうではないかということで、消息による教化の現代版、つまり通信教育をやるうじやないかと。教育の機会均等、大学の開放という精神にも適うことになる。それで昭和二十七年に正式に発足し、現在では関西でいちばん古い通信教育を持つ大学になりました、学生数は三万人ぐらいます。これも法然に学んでハングリーを何とか乗り越えようとする熱意がもたらしたものです。

それからもう一つは、法然が比叡山からおりて東山の地へやってきました。法

然は待つておるんじゃないに自分からまちの中へ出かけて行ったんやと。そういう法然の行動を学ぼうということで、京都市の隅のほうにある大学だけではなしに、ひとつこちらからまちの中へ出て行くんじゃないかと。仏教的発想で申しますと、出開帳というやつでございますね。

それで先代の学長のときにやりましたのが四条センターという社会教育、生涯教育の場なんです、それによって佛大のことが知られてまいりました。また通信教育によって、社会人たちの間にも佛教大学の名前が知られてまいりました。そういうことが結局本体の通学課程のほうにも影響を与えてきました。新しく学部学科つくるときも仏教と何ら関係のないものをつくっちゃいかんと。で、仏教は福祉、ということでは福祉学科をやるうじやないか。それから仏教の文化や歴史を知るために史学科をやる、仏教文学ということで国文学科をやる。英文学科も仏教の国際化のためにやる。そのあと仏教教育ということを中心に考えて教育学科ができました。こういうようなことで仏教を核にして拡大してまい



### 伊藤 唯真氏

いとう ゆいしん/1931年滋賀県生まれ。同志社大学大学院で文化史学を学ぶ。'74年佛教大学教授となり、学生部長、文学部長を経て学長('89-'93)を勤める。'67年より16年間同志社大学文学部(文化史学)非常勤講師。仏教史学、宗教民俗学を専攻。文学博士(佛教大学)。仏教史学会会長('89-'95)。長年滋賀県下の民俗調査、市町史編纂に当たる。現在、滋賀県文化財審議会会長。著書に『伊藤唯真著作集』全4巻(法蔵館刊)他がある。

りまして、私のときには、文学部にありました教育学科をもとに教育学部を独立させたというようなことで、文学、社会の二学部から三学部になりました。学科数も十学科になりました。同時に通信教育も開設した学科に全部つくろうということで、まだ二つだけ新しいところはできていませんが、三学部八学科の通信教育部。それに三学部十学科の通学課程で、現在は大規模大学でございますが、通学生の方はすべての学科に大学院がありますので六千五百人ぐらいおります。そして通信課程の方は先ほど申しました人数なんで、経営的にもプラスです。しかし通学と同じ授業料とれませんから、三分の一と考えて、三万人いても一万人の学生がいるのと同じことです。こういうぐ

あいに佛大の名前が知られてきますと、高校の先生方から「佛教大学という名前を変えたほうがいい。もつと行くはずだ」と。そのころは寺院アレルギーというか、仏教アレルギーがたいへん強かった。だから佛教大学という名前を変えたほうがいいぞと。しかし佛教大学は名前を変えなかった。なぜかと申しますと、これは一種の選考だと。佛教という校名でなおかつやって来てくれるんだから、校名自体に選考効果があるから、変えないでいいということ、いまは変えなくてよかった。建学の精神でございますが、校祖というのはございませんので、言うならば……

笠原 むしろ法然上人。  
伊藤 法然ということになります、展

開すればいろんな言い方がありますが、一つはあらゆる状況の中で、法然の生きざまを学んでいくということ、つまりそれは自ら時代と自分自身の内面を深く見詰めていく人間づくりということ。一言では法然イズムまたは仏教精神ということになるんですが、三学部十学科になりますと、いろんな先生が入ってこれれますね。そうすると、やっぱり建学の精神が何かばやけてくるような状態。このごろ大学の自己評価というのが盛んでございますから、自己評価の中で教員対象に建学の精神について、それを存じますか、またそれを生かしていらないしやいまずかと尋ねますと、やっぱり「よく知っておるほうだと思う」というのと、それから「それがこの大学では生きているな



深田 尚彦氏

ふかだ なおひこ/1923年大阪生まれ、大阪第一師範学校（今の大阪教育大学）を卒業。兵役；歩兵（敦賀）から船舶工兵に転科；香川県豊浜の士官学校を卒業、徳山で終戦。大阪専門学校（今の近畿大学）数学科に編入卒業、高校教諭の後、同志社大学文学部文化学科に編入卒業（心理学専攻）。京都府児童相談所に心理判定員として勤務、'61年、同志社女子大学講師に就任（心理学担当）。'84年より家政学科で“児童発達”の指導、'89年3月定年退職、名誉教授。この間、発達心理、性格検査、創造性、及び描画行動の実験的研究等に従事。“描画行動の実験的研究”で'80年、文学博士号を同志社大学より受領。'89年4月より大阪芸術大学環境計画学科教授に就任、環境心理学、造形心理学を教授し大学院開設後、“芸術行動論”の指導。'95年大阪芸術大学、浪速短期大学の学長を兼任、現在に至る。造形、描画行動に関して論文、翻訳等多数発表した。

と思う」というのと合わせましても大体四〇パーセントぐらい、あと六〇パーセントは、やっぱり横向いている。

だから課題は、一つはそういう建学の精神をいかに教員にも浸透させていくかということですが、学生に対してはいろいろな方法でそれはやっております。仏教学にいたしましても、カリキュラムで必須の中に入れていく。共通科目として仏陀の生涯とか法然の思想と生涯というようなものは必須にしております。しかし先生方はなかなか大変なんで、一つの責任ある立場に立ちますと、それをどのようにして浸透させていくかは大きな課題です。

### 京都精華大学と新島精神

笠原 私どもの京都精華大学ですけれども、実は創立者はいないんです。と申しますのは、先ほどちよつと申しましたように岡本清一氏が初代の学長です。岡本先生を創立者と言ってもいいんですけれども、ご自身で創立者にはしてはいけないということをおっしゃったわけです。それで私どもは全員が創立者である。教職員が創立者、学生が創立者、卒業生が創立者、これから入ってくるであろう人々も創立者である、そのつもりでやるといようなことを言っております。しかも創立記念日もございません。ですから私は学生に話をしたんですけれど、毎日が

創立記念日である。ということとは、毎日が滅亡記念日でなければならんと言って、学生は何を言っているのか全然わからなかったようですけれども、そういう妙な精神でやっております。

建学の理念は、「自由自治」という言葉になっております。これは実は新島襄なんですよね。この背景にはさらにニュウイングランドのプロテスタントの会衆教会の精神というのがあるんですけれども。新島襄は「自由教育、自治教会、両者並行国家万歳」というような言葉を残しております。新島襄の葬式のときには、その言葉を書いた幟を持って歩いたということですね。岡本先生は中学以来同志社の出身ですから、恐らくその影響があったのでしょう。ただし、私どもの大学

はキリスト教主義ではありませんで、むしろキリスト教を越えた自由自治の精神というのを、唯一の理念というふうに考えております。

私、思いますのに、自由という言葉は二つの意味がある。プラスの意味とマイナスの意味がある。よく「自由と責任」というような言葉を使いますけれども、あれはちよつと間違っているんじゃないか。自由というのは実は責任と無責任の結合体である。だから自由と責任という、さらに責任が加わるわけですから。

高等学校や中学校の校長先生が自由と責任ということをよく言われるんですけども、あれは責任ということを言いたいためにおっしゃっているんですね。いまの若い人のためにはそういうことを言いたくなるという気持ちはわかりますけれども、むしろ自由というものには無責任があるんです。非常に恐ろしい思想であり、同時にすばらしい思想だという、ある種のパラドックスといえますか、こういう二重性というのが私は自由という言葉だと思うわけです。

建学の精神というようなのはどの大

学にもあると思いますけれども、例えば理想とか希望とか、あるいは愛とか幸福とかいう言葉を使っておられるところもあるかと思いますが、それはそれで深い意味があるんでしょうけれども、プラスとマイナスを持つていない。むしろ自由というのはそういうすばらしい面と恐ろしい面があると思います。これをあえてわれわれの大学の理念にしている。そのために大学当局はたいへん苦慮しております。最近の学生がいろいろ勝手なことをやるから。しかし、もちろん責任があるということを使うんですけれども、私はやっぱり非常に高い見地に立つて自由ということ唱え続けなければならんと思います。青春時代には多少の逸脱というのはつきものです。逸脱がいいと言っているわけじゃないですけれど、多少の逸脱は構わない。それよりも高い自由を目指して歩んでほしいと考えているんです。その意味でわれわれは新島精神の内容を新しくし、高めていきたいと思つてやっているつもりです。

深田 そういうのを聞くと、ぼくはやっぱり学校には建学の精神、一つのスピリ

ットが必要だと思いますね。

笠原 いや先生のところで、その塚本先生ですか、その方が子供さんとか、美術とかいうことをやられた。

深田 ええ。これは全部正しいことです。舞台芸術だとか、芸術計画なんて、もうだれもが知らないような学科まであります。

北崎 だからそういう創立者の生きざまとか、そういう短い言葉ではあらわせないものがあるはずだね。それが一つの学校の品位、理念となつていなければならぬと思います。ところが入つてこられる教職員の方がそれに賛同してこられたのかといえ、そうではなくて、労働条件がいいから、たまたま採用していただけだから来たというような人だから問題なんです。それから、私学へ来たといういう一つの、まあ家で言えば家風というようなものがある。学風があるんじゃないかと。それを学んで、それに同化するといふのでなければならぬのに、それを無視し、それを破壊しようとする人が最近多いんじゃないかなと思います。これは私がいまいちばん危惧するところ

なんですけどね。

## 「平成之大馬鹿門」について

伊藤 佛教大学には同志社大学を出られた方もいらつしやるんですが、この方は英文科の先生なんです。そういう宗教系の大学で学ばれておられる方はやっぱり筋を通すというか、人生に対して信念を持っていらつしやる。そういうようにほかの先生方にも教育をお願いしたいし、また学生もそういうぐあいに育ってほしいと思うわけです。

最近、先生方もご承知の建学精神との絡みで問題になってきました「平成之大馬鹿門」という(笑)、私どもの大学のことが話題になりましたので、ちょっとお話をしてみたいと思うんです。

われわれは開かれた大学ということで大仰な門はつくらないという方針なんです。いろいろな整備事業をしておるときに、請け負いました方の関係者から「正門がないからひとつつくって寄付をしてあげましょう」と。「それは結構だ。調和がとれるんだったらありがたいことだから」と言って、それを受けたわけなんです。

ところが、できたときにちょうど目の高さのところに、その彫刻家の方が「平成之大馬鹿門」という文句を書いておられた。はじめその場所には養生のために巻きものがしてあったんで見えなかった。それを取りましたときに教員が見つ

けられて、こんなことでええのかというようなことになったんです。その彫刻家の考えによれば、人間バカになって、しっかりと勉強してくれという意図で、「平成之大馬鹿門」という文字を彫られたわけですが、さて、それを寄付を受ける側の佛教大学といたしましては、教育機関で平成の大馬鹿門というのはどうなんだろうかということになりました。論議が職員の間でも教員の間でもありまして、「いいじゃないか、そんな細かく言わんでも」というのもあれば、「いやいや、だめだ」という意見もありました。意見を集約してまいりますと、一つは言葉に品性がないという。発音しますと大バカ者に通ずるわけですね。それから二番目には、バカということとは、仏教

の幕何という言葉からきておるんですが、これは中世の僧侶が仲間うちで相手を侮辱する言葉として使っていた言葉なんです、そういう点が仏教の内部にもありましたので、ましていわんや、ということになります。バカは自分に対しては謙遜語になるんです。しかし、ほかの者に対しては、これは侮辱語になって不愉快語になってきますね。どこともみな人権問題というように考えていろいろと考えっております中で、そういうみずからが使っておった、人権を守ってこなかったというような私どもにも負い目がありますね、その負い目があるものがまたバカもんとというような言葉を使っているのかというのがこれが第二の……。

こまではまあいいんですが、その次なんです。その彫刻家が言うのには、法然の思想の中には還愚痴、愚痴に還るというのがあつた。確かに法然は還愚痴ということをお教えているんです。それなのちやんとした宗教思想の体系の中で出てくる言葉なんです。その彫刻家いわく、法然にある還愚痴の言葉をこういうぐあいに大馬鹿門と表現した」と言う

わけです。じゃあ大馬鹿と還愚痴とは同じなのか、どうなのかとなってきますし、愚痴に還るといのは、やはり自分自身を見つめて、徹底した内省のもとに開かれる宗教的な世界なんです。そういう法然の宗教観なり考え方と、この人が言うその馬鹿と、はたして一致するのか。この人のどういう教育観、あるいは人生観、あるいは思想観、それが法然と一致しているのかとなりますと、法然の還愚痴と同義語とはどうしても言えない。本人は同義語だと言っています。しかし強弁ですね。他に對して侮蔑語になるような不愉快語を使った言葉が、この法然主義の教育機関として適正な言葉であろいかということになる。法然の思想とは全然違

と。だからこれはもうだめだと。「言葉を削ってくれ」とか「かえてくれ」と言ったのですが、その人は「いや、芸術家の信念でもってかえられません」と言うわけで、いろいろ折衝がありまして、結局は「自分で寄付したんだけれども、大学で受け入れてもらえなければ持つて帰ります」と言っ

て持つております人間育成上の基本理念と合一するかどうか。われわれはしないと考えたわけなんです。ずいぶんテレビとか新聞で騒がせましたけど、マスコミはそのところをなにごと一つ言っくれないで、表面的なところだけでおもしろがって……。

笠原 それをきっかけにして建学の理念論が起こっているということは、ある意味でよかつたんじゃないですか。その言葉の当否は別として。

伊藤 そうです。だからそれによって無関心だった先生方にも考えてもらえる。それからまたあえて言うならば、その彫刻家にもひとつ法然の勉強をしていただきたいという考えも私にはあるんですがね(笑)。

北崎 私の大学のほうでも学生募集に大学案内を出しておりますけれども、以前はそのいちばん初めに、この大学はどんな形でできたのか、建学の精神は何かということを受験生にアピールしないで、どんな施設や科目があるかというような教育情報を載せていました。そんなところから私は変えていかなければならないと思います、実行しています。

伊藤 門柱問題については、卒業生の間でも賛否いろいろ言う人があったのですが、いま申したような話を大学の見解として、同窓会報とか、大学の広報誌にも出しました。それからびたつとやみま

### 「教育力」と 若者を好きなことが重要

笠原 建学の精神が私学の大きな特徴であるということを話していただいたわけですが、それに基づいてこれから大学の教育、特に私学教育をどのようにしていくか。これは非常に大きな問題ですが、それぞれの先生方の大学で、特にこれからの私学教育についてどのようにお考えになっているか、その特徴的な問題を話していただければと思います。

深田 ほとんどこにはずいぶん多種多様な人が、東大からも、京大からも、東京芸大も京都芸大からもたくさん来ているんです。で、私は口幅つたいことは何も言うわないんです。ほくが何かみなに向かって言えるのは入学式と卒業式。これは学生に向かって言うんですけれども、

ぼくはやっぱり壇上にいる先生方を大いに意識しています。

そこで私が言おうとしていることなんですけれども、私学は国立と違いますから学生が来なければ、志願者がなければ立っていかない。入試課をつくって、どこもが対策を立てるんですけど、入試課で学生を集められるのは一、二年のことだと思っんです。何ぼやってみたって、あとは教師の実力がものをいうと思います。教師の実力って何かというと、教師の持っている教育力だと思っんです。教育力というのでいちばん大事なのは、教えるのが好き、若者が好き、この二つだと思います。この二つがまず一番で、その次はその人が社会的に評価されるような業績を上げていたり、あるいは芸術家だったら展覧会で賞をもらっているとか、演奏会で多くの観客を引き寄せているとかいうことだと思っんです。一があつて二があつたらよろしい。二だけあつて一がなかったら、これノーベル賞をもらつていてもだめ、おれは教えるのは嫌いだという人はね。ただ、客員教授として、あの先生があそこにいるというので

学生を呼べるかもしれないけど。ですからぼくは先生方にやっぱり教授術を考えてもらわないといかんといつも思っています。教育が好きでなければいかん。

それからもう一つ、芸大の問題として、日本の芸大というのは、芸術はたぶん教えない。ついていこいとか盗めと、こう言つたと思っんです。東京芸大にしても京都芸大にしても、特に日本画の先生などは、これは手とり足とりで教えてもらわなかつたのじゃないかなと思います。だけど、いま芸大という学校組織ができて、これを教える限り、極意は教えられんでも、賞は取れなくても、基本的なところ、たぶん芸道の三〇パーセントとか四〇パーセントは、レクチャー方式にして述べられなければいかんと思っんです。ところが、日本人は言葉で述べるというののが非常に下手ですね。

レポート、レポートといつて学校が課しますけど、レポートというのは何をやったか、何を経験したかをデスクライブすることなのに日本では感想なんです。感想をレポートという日本では、言語でものを構築するということはできないと

ぼくは思っています。つまり哲学がいちばん日本人には欠けている。そういう意味で、私は先生方に業績と同時に、学生に言葉で自分の意を伝えてもらいたい。極端に言うと、電話で授業ができる人でないといかんとぼくは思っています。「ちょっと電話では話しにくい。今すぐに行つて、見せるから」、これじゃ授業にならないでしょうね。

笠原 論理的にということですね。

深田 論理ではないです。これはまずコミュニケーションでもあるし、デスクライブということ。自分の行動や感想を全部言葉にして、目の見えない人にでも伝えられるということがまず第一。

笠原 ですからパトスをログス化すると。

深田 そうそう。そう言つてもいいですね。ログスという言葉がロジックをつくっているわけでしょう。日本人の言葉はぼくにはうまくできてないように感じられます。英語でよく言うインアザワーズという、これが使えない。「先生、もうちょっとわかるように言うてください、それがまだわからん」。英語だつたらすぐ

インアザワーズ、もう一つわからんときはフォークイグザンプルと言うでしょう。こういう話法が使えないと、ぼくは大学は立っていないと思っています。私が教育でいちばん大事だと思うことはまづ先生。設備ではないと思いますね。

それからもう一つ、芸術の先生ですから、「どこどこで何々展をやっている。何々ショーをやっている。これを学生を連れて行って見せんことには、今日の社会についていけない」と言うんです。だけど、社会が今日の、学校よりすぐれていることはぼくは知っているけれども、学校というのは、この限られた「空間」の、限られた九時から五時までの「時間」の、小世界の中で、将来社会で役立つであろうことを教えようとしているわけですから、すべての教師が「あれを見にいかんと教育ができない」なんて言い出したら学校は解体する。ですから私は「学外授業は休暇中か何かでなければだめです」と言っています。

## テクニクだけ 学んでも

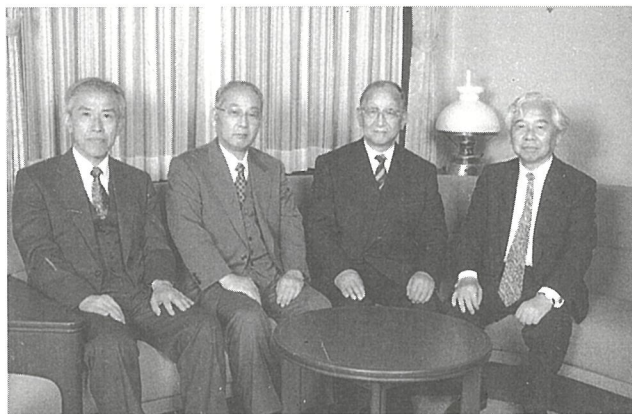
北崎 私の大学は経済・経営系の大学ですからね。経済の動きとか社会の動向に教員も目がいき、最近では情報化社会だと言うことでコンピュータとかに重点を置いてやっていくというところが見られます。けれども、大学ではもうちよつと精神面、倫理面と言ってもいいと思います。が、そういうものをしっかり教えてやらないといけないと思います。コンピュータなどのテクニクだけ学んでも、本当に社会に出て役立つ人間ができるかどうか疑問に思うんです。それが一つ欠けています。先ほどの建学の精神等とつながるんですけれど、一体大学で何を教えるのかということを実際に考えなければなりません。私の大学では、最近、本をじっくり読み、思索する学生が減少しました。考えることよりも、コンピュータを操作することなどに関心が移っています。これは楽しいらしく、それならば、熱心に興味もってやっています。先生もまたそうしたことの指導を熱心にして下

さっていますが、もうちよつと哲学といえますか、そんなものをちゃんと大学で学ばせないといけないのではないかと思うんですけれど。

笠原 いまおっしゃったことで申し上げます、最近では倫理性の欠如した経済問題といえますか、非常に多いわけですね、あらゆるところで。バブル経済というのはその象徴でしたけれども、そういう意味で、いま北崎先生のおっしゃった経済学における倫理性ということは非常に大事だと思っていますね。同時にそれは思想性であり、哲理性です。経済の大学であるところはそのにあらわれるのじゃないでしょうかね。

北崎 だから時代とともに、さまざまに変わっていかねければならないけれども、なお維持し追求していかねければならない問題がある。それを教職員が見つけて、そしてそれを教えるということにならないといけないと思うんですね。

伊藤 私の大学は、もちろん仏教をバックにした人文系の大学です。じゃあどういう人間をつくるのかということが問題です、もちろん知識も基本的に大事です



が、その知識はいろんな専攻の学科によって限定されてまいりますね。考え方も、自分自身が一つの課題を見つけてやっていくというのではなしに、与えられたカリキュラムのままというようなことになる、やっぱり型にはまったような学生

しかできない。それを取つばらうために、やはり一つには、カリキュラムの上からも、もつと学科の枠を外し、学際的なものを大いに提供しなきゃいけないということ。もう一つは、あらゆる機会に宗教的なことに触れさせるということ。いまの学生はイベントは好きなんです、本当に深く、人間とか、あるいは生とか死とか、生き方とかについては、それを考える機会が少ない。年齢的にもまだそれに達しておりません。これは語弊がありますけれども、経験をそんなに積んでおりませんので、そういうところをもっと開拓していくために、私学だからこそできる宗教教育も、やっていかねばならぬのじゃないか。この点で宗教部の役割は非常に大きいと思います。宗教部が中心でやりますが、人間づくり、つまり生き方、考え方にいろんな材料を与えてやるということで、一つに学生授戒会というのがあります。授戒会を受けて、人としての生き方を知ってもらう。そのあと初めて戒を受けたというので戒名というのが授けられるわけです。

笠原 戒名は本当は死んでからつけるも

のじゃなくて法名ですわね。

伊藤 そうです、生きている間の。世間では誤解されています。その是正もやっていかないといいけませんね。まあブデストネームを、その時もらうわけです。それを通学の学生や通信の学生に勧め、合同でやつたりするんですが、やっぱり通学の学生はなかなかそういう宗教的なものには早く入ってくれないですね。ところが、通信の学生さんは言わなくとも参加してくれる。つまり、それだけ人生のいろんな経験を積んでいる社会人、高年齢の方が多いですからね。通学のほうはイベントやつたら参加するけれども、なかなかじつくりと自分で考えていくことに機会をつくっても来てくれません。

そこが宗教部なんかの課題だと思っておるんですが、教育課程の中でもそういうようなことに触れさせるようなものというところで、先ほどちょっと申しましたように一般教育を解体して共通科目というのにして、共通科目には学際と教養科目と。いまは自由に自分で選んでやってもらおうと。その選びの中で真剣にやつ

でもらうということ、学際科目のほうでは「法然の宗教と生活」、教養のほうでは「仏陀の教え」という、これだけを必須にしておりまして、そのほかは宗教的なものは一切カリキュラムの中には入れておりませんが、国文の人も史学の人も、できるだけ何か仏教的なものを素材にした教材でやるというようなことで、宗教に触れる機会はほかの大学よりは多いんじゃないかと思っております。やっぱりそういう工夫も大事ですね。

それを実際にやっていくには、教員側の力量も必要であります。教員のための教育も必要ではないかということで、教員の研修会でも、宗教のものをやつたり、初めて入った新任の先生は知恩院へ行くとか、そんなことをやっておるんです。

### 知的空間を 深める場として

笠原 先ほど深田先生がおっしゃったことと共通する面と、少し違う面を申し上げるかと思いますが、私は大学というの、これから知的空間としての大学ということにならないの

ではないかというふうに思っています。

いままで十八歳から二十二歳ぐらいの青年男女を集めて大学が成り立っておったわけですが、そういう限られた世代だけを相手に教員も教育している、あるいは研究しているということでは、知的な深まりというか、知的空間性が狭い。先ほど深田先生は、その狭いところに意味があるとおっしゃいました。そのよさもちろんありますけれども、同時にもう少し広い知的空間としての大学、大学という言葉を使わなくても、本当に知的な空間として、それを深めていく場所としての大学というのは大事じゃないかと思えます。

それから少し話が飛ぶかもしれませんが、けれども、一時、大学がレジャーランドになっているということが言われた。私はちよつと異論があるのですが、レジャーランドというけれども、レジャーという言葉は、もともとギリシア語ではスコレー、ラテン語ではスコラという言葉で、時間的、あるいは空間的な暇ということ。スコラ哲学というたいへん難解な哲学もございましたけれども、あるいは

スクールとかスカラシップというのは、全部そのスコレー、スコラからきているということからいうと、もとは時間的、空間的に暇ということです。ですから大学こそ本当の意味で暇というか、レジャー、これはいわゆる娯楽という意味でのレジャーじゃなくて、知的空間としての自由な余裕のある空間です。その中で学ぶという意味の、レジャーランドであるべきだと思えます。それも青年男女だけではなくて、これからはますます十八歳人口が減少していきますから、社会人といいますが、あるいは家庭の主婦とか、あるいは定年退職された方々とかが大学にもっと入ってきていただきたい。そうすると、世代を越えた、あるいはいろいろな体験からくるところの影響というのが非常にあるでしょう。これは教師に対しても非常に意味があると思います。そういうような意味での知的空間としての大学をつくっていかねばならないんじゃないかと思っています。

私どもの大学は、人文学部と美術学部です。文化と芸術の複合大学というようなことを言っております。芸術系の大

学はだいたい単科大学が多いんですけども、われわれのほうは複合大学であるということ、これからの芸術は、やはり広い意味での文化とかかわらなければならぬ。また、文化は文化の一つの大きな花であるところの芸術的な精神をもつていなきゃならない。いままでは経済優先、あるいは社会的な問題優先、これは非常に意味があるわけですけども、これからは二十一世紀に向かって、日本は文化と芸術を目指していかなきゃならん。世界では日本のことをだれも文化国家とは言ってくれない。芸術国家とは言ってくれない。経済大国であるとは言われてきた。あるいは政治上のいろいろ貢獻もしておるようですけれども、それだけではいけないんじゃないかと思っています。

深田 ぼくはこれ難しいんですが、十八歳人口の四六・八パーセントがこし大（短大、専門学校を含む）に行っているんですね。そうすると戦前、昭和十八年、日本の大学は四十七校でした。二十四年ぐらいいから短大ができて、そのうち国公立が二十九校、私学は十八校だった

んです。そのころの学生数は、たぶん四五パーセントだったと思います。そのころは大学を出たというのは、それだけでエリートであつたんですね。その大学人といまの四六・二パーセント、千人中の四百六十二番目の学生と比べたら、これは間違いでしょう。ですからぼくは質的な、これを教えねば、あれを教えねばというカリキュラムの内容とか、知識内容のようなことは論じて意味がないと思うんです。一番でノーベル賞を将来もらう人もいる。だけど、同じ大学の中で四百六十八番目もありますから。いつも考えるのは、日本の教育は暗記もの、知識の伝達を重視してきたように思いますね。明治以後の日本はヨーロッパに追いつけということに忙しかつた。それが伝統になつて、文部省の役人もそうだし、国公立の先生もみなそうだと思います。ごくちよつとの目のある人だけが外国語を学んで、たぶん賞をもらっている人々はヨーロッパ語の訓練を自分でやって、そしてロゴスを解し、サイエンスを身につけたのではないでしょうか。

ですから大事なことはカリキュラムの

内容ではない、教師のしゃべる講義の内容は全部図書館にある。ただ、だれも行かんだけなんです。ですから大学の二年や四年間寝ていても起きていても大したことはない。ただ、ぼくは毎年、学生に「スタディというのは、自分で自分を教育することである。スタディする人をスチューデントと言う。スタディというのは、学校にいる期間にその後の六十年の人生に対する備えをするのである」と言っています。ですからあと六十年知識を求めて生きる、知識が大事ではないんですけど、何かがわからんときには求めるという姿勢が身につくためには、わからせることが大事。話がわかるということとは、絶対に喜びを引き起こすんです。喜びは進歩の意欲を引き起こします。

ですから物理学の教科書はアメリカも日本もみんな同じ、ニュートンやガリレイ、アインシュタインが並んでいると思います。ところが、習う先生によって、物理学を好きになる子供とならん子があるんです。ですから内容に日本人は重点を置きすぎている。学生に知ることの喜びと、それを好きにさせる教授の工夫が

なかったらだめだと思えますね。

## 同志社への提言―

### 建物は立派になったが

笠原 ありがとうございます。

それでは最後にお互い同志社大学の卒業生でございます。それぞれの先生方から同志社への提言をいただきたい。いま同志社は少し停滞しているような感じがいたします。昔はもつと生き生きしていたように思います。これからもつと自由に積極的にやってほしいと思っておりますので、率直なご批判、ご提言をおっしゃっていただきたい。

北崎 私は最近の同志社の教育について詳しいことは知りません。今も宗教学が必修科目なのかどうかは存じませんが、私らが学生のときは宗教学が必修で、そこでキリスト教についてや新島襄について学びました。また、チャペル・アワーやアッセンブリー・アワーがあつて話を聞きに行くというようなことで、自然と同志社らしさというものを身につけていったんじゃないかと思うんです。しかしこのごろはどの大学でも設けてい

るような専門科目を重視しているようですね。そうすると、先ほど申しましたように何も同志社でなくもいいわけであり、他の国公立と変わらなくなってしまう。同志社のいいところを伸ばそうと思うのであれば、どうしても残さなければならぬものの、植えつけなければならぬものをちゃんと学生に教えないままでも掲示板に聖書の文言の一つは書かれていますけれども、そういうことだけではなくて、やはり学生はもつと積極的な、また反面、学生に対し義務として学ばせるといふような状態にしておかないといけないと思えますね。

これは先生方にもいえることです。私はあまりいい学生ではありませんでしたけれども、私らの時代は新島先生の「社員は学生を大切にせよ」ということを先生も守っておられたし、学生もそういう新島先生の言われたことをいろんな場で知る機会があり、自然と身につけていた気がします。同志社らしい科目、教育を行う機会をなくしてしまうと、本当に何のために同志社があるんだろうかと考

えます。建物はびつくりするように立派になりましたけれども。

笠原 新島襄をどう教えるかということ、あるとき同志社の方に聞かれたんですけれどもね。私は新島襄という個人は、語弊がちよつとありますけれども、福沢諭吉などと比べても、そんなに大した人ではない。しかし、新島という人は多くの連中に人格的な影響を与えて、そして新島を囲む人々、新島襄とその時代をつくり上げた人であつて、これはちよつと前に申しました、おれについてこいという強力なリーダーではなくて、むしろ私の言葉で言うと、「空虚な中心」として、そういう形で人を引きつける人であつた。そういう意味での新島、つまり新島の生まれてから死ぬまでの話をするよりも、新島襄がどのような時代に生きて、その周辺にどのような波紋が起つたか、そしてどういふ人々が現れたかといううような、そういう全体的なものを学生諸君に伝えるべきじゃないかと思うんです。

深田 ぼくは信仰もないし、証明されな

いて、いつも思い出すのは、クリスマスのころの全学でやる礼拝、キャンドルサービス。外は寒風でロウソクの炎が吹きちぎれるほどでね。そしてベルをたたきますよね。あの音と、あの寒かったのは忘れませんね。電車の道に出て、振り返れば何度も歌が聞こえて、白いガウン着た人が見えているんです。ですから、ああいう感動の体験は皮膚からしみ込むもの。ぼくは教師の百万陀羅よりも、あの式に一回出るだけがすごいと思いますね。そして切符がなかなか手に入らなくて、開会前から何かあの網代みたいなところをギューギュー押して待ちかねて入った。ぼくはそういうものを見ると宗教的儀式、セレモニー、あるいは形式にはすごい感化力があると思います。

それからもう一つ、今度はこれは批判なんです、同志社は同志社精神とかなんとか言いすぎる。大学は勉強すればいいので、校祖の宣伝などする必要なんかちょっともないと思います。福沢諭吉と比べて、おっしゃったとおりなんです、あの岩波文庫には残念ながら一冊しか入っていない。書簡集。だけど、それがやっ

ぱり新島襄のグレートマンであるところだと私は思います。彼は教師でもプロフェッサーではなかったと感じています。だから伝道の人として旅行く若者たちいろいろな精神的支えをし、ものを送っていた。それが偉大。そして今、学校には毎週何か書いてありますよね、週一回、新島襄の言葉が。あれをときどき通りにから読んでいて、あれはどれもいい言葉だと思っています。ぼくはいまの学校でも、大学はまず学生を大事にすべきだと言うんですが、ちょっとためらうのは、新島襄の言葉だと知っているからです。あいつは同志社の宣伝をしていると思われるのは嫌です(笑)。だけど、間違いありませんね。いかなる大学も特に私学は絶対に学生をまず大事にすべきだと思います。

伊藤 私はやっぱ同志社がほかの私学に比べまして何か引きつけるものがあると思いますよね。

深田 それは信じます、あります。

伊藤 現在の大学生というのはパッセンジャーですね。四年間ぶらっと通り過ぎるだけですね。ただ、その出た大学が本

当に母校となりうるかどうか。母校というのはまた帰ってくる母なる港であつてもいい。その点で、ホームカミングデーという名称で同窓会をやっていらつしやるでしょう。ぼくはあれはすばらしいと思うんです。本当に出た大学がわがふるさと、もう一回いかりをそこへおろそうというように、帰っていかうという気持ちになりうるというのは、本当にすばらしいと思うんです。

ぼくなんか五年間、ただ大学院におつただけなんです、しかし、同志社という、ほかの大学とは違ったものがあつたように思うんです。一体そのころ大学側はどういう施策をやったんでしょうかね。母港としての同志社、その誘引力の秘密は何だろうか、ぼくはいつも考えておるんですがね。それが伝統というものかなと思いますね。雰囲気と申しますか、それがこの大学にはほかの私学に比べて横溢しておるように思うんです。

ですからお願いをしたいのは、そういう良いものを持つていらつしやる大学と、まだ発展途上の私どものような大学とのその間の交流、ヒューマンネットワ

ーク、同窓を通してでも結構ですから、ネットワークができないものか、ということとです。

## 批判を生かせ

笠原 私も同志社にはかなり批判的なところがあります。しかしながら、同志社というところは幾ら批判をしても、幾らある意味で悪口を言っても、それに耐えるところである。むしろそういうものを生かしてやってくれるところだと思っておりますので、安心して批判を言うべきではないかと思えます。卒業生も遠慮するんじゃないくて、太いに自由に言ったらいい。そういう自由というのは、ぼくはやっぱり同志社から学んだと思いますね。それはもとはキリスト教であり、あるいは新島襄でしようけれども、しかしそういうものを越えた一種の学風というか、雰囲気というものがあります。先ほど深田先生はクリスマスの雰囲気というようなことをおっしゃったわけですけど、やっぱりそういうものを通してわれわれに伝えられている。しかし、具体的

にはいろいろな文句を言いたいところが出てくるわけです。そういうことを大いに言って、そしてその意味で、批判的な意味でも同志社を愛していくということが必要じゃないだろうかと思っておりますけれども。

深田 ぼくも批判的に考えているんですけど、しかし批判してもなおかつ同志社はすごいんですね。それは解説すれば、伝統かな、古さかなと思うし、やっぱり新島襄なんでしょうね。

伊藤 伝統でしようし、それでまたやっぱり懐が深い。

笠原 だから安心して批判できるわけですよ。

深田 ただ、その伝統という言葉が訳がわからん。伝統はどこにありますかという、どこにもないんです。

ぼくのいま一つの答えは、私がここに二十八年いてよかったのは、同僚の先生方がよかったという事です。中瀬古和さんと片桐哲先生とかあいう人、ぼくは何もじつここに話したことはないです。だけど、片桐先生なんて、太った大きな格好で歩いているのを見ると、旧約

聖書が歩いているようなもんだと、いつも思っていました(笑)。人に伝統が宿っていた。

笠原 私はもう一つ、別の意味で申したいのは、同志社は昔、卒業生よりもむしろ中退者に非常にすばらしい人がいた。

徳富蘇峰、徳富蘆花でしよう、山室軍平もですね。日本社会主義の父、山川均もそうです。大逆事件で殺された医者の大石誠之助。日本で最初に資本論を全訳した高島素之、これは神学部の中退です。こういうふうの中退者列伝というのがあるんですよ。というのは、やはりそれだけ自由な精神があって、しかしそういう中退した人は、ある意味で同志社を愛しているということですね。これは東京では早稲田ですよ。早稲田の文学部というか、これは北村透谷に始まって寺山修司、あるいは五木寛之に至るまで、すぐれた中退者列伝があるんですけど、私は中退者というのは非常に興味があるんです。それは、学校を批判して自らやめるけれども、しかし、それに足る大学であるということであらわしているんじゃないか。そういう形で卒業生のみならず、

中退者は卒業生になってないようですけど、もつと広くそういう人たちを生かしていくというようなことが、同志社が特にもっている自由のあらわれじゃないだろうかと思えますけど。

**編集委員** いま男子の学生ばかり出ているんですけど、女子部でも卒業してないで活躍している人というのが多い。海老名みや、それから朝鮮で女子教育に献身した淵沢能恵という人がいます。ですから男子のみならず、女子のほうにもそういう……。

**伊藤** そういう同志社人脈の広さ。

**深田** 中退する人は学校の度量とは無関係です。能ある人は中退します。学校におけるのは詰まらんから。才能ある人は、特に作家はそうですね、多い。

**伊藤** 同志社で学ばれて、そして校則に基づく何年間在籍ということやなしに、途中であつても、出て行つて自分の力量を発揮される。

**深田** 力があるからね。

**伊藤** それを育てている同志社という教育環境、これだと思えますね。そういうものがずっと大同同志社人脈、これが同志

社の強いところになってますね。そこまできこうと思うと、私のところはこれから先の話で。

**北崎** いわゆるキリスト教教育、それから良心教育と言われているそういうものはやはり同志社にはずっとあり、だから中小企業の経営者などが多い。大企業の社長は多くないけれど。

**深田** それはやっぱり、地の塩なんて言葉があるでしょう。同志社の人は人を追いついて栄達しようなんて気をもたないんでしょうね。

**笠原** そうそう、それはそういうことだと思えますよ。能力がないということも多少あるかも知らんけれども、それよりもやっぱり権力志向じゃないということですね。

**深田** ええ。それともう一人を追い抜くような覇気をもたないからね。上から見ても、これを頼みにしてやろうという気にはならんのだろうと(笑)。ぼくはよい意味で言っています。同志社というのは、宗教教育もここまで徹底したら、これもよしあしだな、なんて思ってますがね(笑)。

**笠原** いやあ、権威主義じゃないというところが非常にいいと思いますね。

**伊藤** これは同志社のたいへんな長所ですね。新島襄のことを知ろうというのも、実際、在学中聞いてなくても、勉強していなくても、卒業してからある機会に、よし新島のことを読んでみようという、そういう気持ちを起こさせるところが同志社です。やっぱりすごいなと思えますね。

**笠原** あとから気がつく。もつと同志社に対する注文というか、提言をしていただいてもよかつたんですが、最後は同志社はやはりいいということですね。同志社も大いに考えていただいて、たいへん期待しておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。

どうもありがとうございます。